

飯田女子短期大学の図書館における 利用調査と評価に関する考察

塩 沢 千 文・木 下 雅 子・片 桐 充 昭

Investigation of Library Use and Evaluation in
Iida Women's Junior College

Chifumi SHIOZAWA, Masako KINOSHITA and Mitsuaki KATAGIRI

要旨：本稿は、飯田女子短期大学の図書館において行った統計業務および調査について、図書館評価の視点から考察し、まとめて報告するものである。

調査は、1.平成16年度卒業生の在学中の図書貸出冊数統計から、看護学科生の貸出冊数が多いことに着目し、看護学科生の学年ごとの利用状況を7年間遡って調査し、その特徴的利用傾向を捉えた。2.看護学科関係教員にアンケート調査を行い、学生の図書館利用状況に関する教員の評価をまとめ、学習支援としての図書館の機能を探った。3.看護学科教養講座における図書館ガイダンスの際のアンケート調査より入学時の読書嗜好と図書館利用嗜好が在学中の図書貸出状況とどのように関係しているかを求めた。4.平成12年度に行った開館時間延長に関する試行調査の結果から、開館時間延長の必要性和その後の図書館の対応を報告した。5.本学公開講座受講者にアンケート調査を行い、図書館を地域に公開した場合、地域住民としてどのような分野に興味関心をもっているか調査した。

まとめとして、本学図書館の機能である 1.学習支援 2.読書支援 3.情報環境支援について、調査の結果および図書館の現状から、本学図書館の役割とニーズについての評価の一助となるよう考察した。

Key words：飯田女子短期大学図書館 (Iida Women's Junior College Library), 図書館利用調査 (Investigation of Library Use), 図書館評価 (Library Evaluation)

はじめに

近年の大学図書館は、情報化社会の進展による大学内外の環境の変化、業務の機械化による運営の合理化、情報収集の改善および増改築等により、情報センターとして変貌しつつある。様々な学術情報を学生や研究者に提供することを通じて、大学の目標である高等教育および学術研究を支援する役割を担う図書館は、利用形態の多様化に合わせ「利用者と図書館との関係性の変化」に対応した利用者志向の図書館サービスを提供する必要が生

じている¹⁾。また、大学図書館と公共図書館は機能や資料が異なるとする従来の「棲み分け論」についても、館種別あるいは個々に社会や組織への存在をアピールするためアイデンティティやビジョンを論じる方向²⁾や、大学図書館は学習研究図書館機能の枠のみではなく、いつでも豊かな読書が可能な学習図書館であり、変化し続ける現代の若者である学生の嗜好にあう楽しく豊かな読書材を幅広く用意して、読書習慣形成の環境の提供を理念とすべきではないかという論³⁾もある。地方の小規模な私立短期大学図書館においても、

方針を明らかにした運用を図ることが望まれている。

こうした大学図書館の評価は「蔵書量や利用量などの基礎的なデータを業務・サービスの改善などに活用するには、適切な文脈においてそれらの意味を正確にとらえ、ときには他のデータを組み合わせて分析する必要がある」⁴⁾のである。大学という枠組みにおいて実施する図書館の評価は、一義的に図書館の活動がどのように学生・教員等の学習・研究に寄与しているかが問われることであり、物理的規模の大小ではないと考えられる。

本稿では、これまで本学図書館が行ってきた次の5つの調査を分析し、評価の一助として報告するものである。

1. 貸出利用統計
2. 看護学科関係教員アンケート調査
3. 看護学科教養講座受講生アンケート調査
4. 開館時間延長試験試行調査結果
5. 公開講座受講者アンケート調査

さらに諸データからの考察を加えることにより、今後の本学図書館業務・サービスの指針を考えるための一助とするものである。

1. 図書館貸出利用統計

1) 方 法

図書館総合管理システム『情報館95』ブレインテック社（以下、「図書館管理システム」という）を使用し、平成16年度卒業生の在学中の貸出冊数データを出力した。平均的な学生利用者像を明らかにするために、在学中に留年・休学・復学等の学籍変更があった学生は貸出冊数が両極端の者が多かったため除くこととし、334名について各学科・コース・専攻ごとに、在学中の平均貸出冊数・1年間の平均貸出冊数・在学中に全く貸出利用のなかった学生の人数とその割合を求め、集計した。考察は、『日本の図書館 2004』⁵⁾から見た短期大学図書館像をまとめた伊藤氏の資料⁶⁾を参考にした。

集計結果から、特徴的と思われる看護学科生について、平成11年度から遡るデータをまとめた。

考察は、日本看護図書館協会2003年度会員実態調査報告⁷⁾をもとに集計し、比較を行った。

次に、看護学科生の学年ごとの貸出図書の特徴を探るために、図書館管理システムにより、看護学科生の「貸出図書ベスト30」の出力を行い、該当図書の平均貸出回数について5年分を集計した。また貸出回数が3回以上あった図書の冊数についても5年分を集計した。

2) 結果および考察

平成16年度卒業生の在学中の図書貸出冊数について表1にまとめた。334名の在学中の貸出冊数は、平均19.3冊/人であった。学科・専攻・コースごとに在学期間が異なるため、それぞれ1年間の平均にすると、11.6冊であった。

貸出冊数について、館種別貸出冊数^{8,9)}と比較したのが表2である。短期大学256館の年間学生貸出冊数/学生数は6.0冊であり、本学の11.6冊は多いと評価できる。

貸出冊数の特徴は、看護学科19.8冊・看護系専攻科の助産学専攻31.1冊・地域看護学専攻25.1冊と貸出冊数が多く、さらに看護学科と看護系専攻科には図書貸出冊数0冊の学生がいなかったことであった。その反面、介護福祉士の養成課程である生活福祉コース2.3冊・福祉専攻3.2冊・生活デザインコース0.9冊は貸出冊数が少なく、図書貸出冊数0冊の学生が多かった。

また、在学中に全く貸出をしなかった学生は、全体では36名(10.8%)であった。

専攻科学生は1年課程であり少人数である。そのうえ年齢差・社会人経験の有無等があるため図書館の活用状況に個人差があると考えられる。そこで、看護系学生のうち看護学科の貸出冊数を一期生(平成8年入学生)からまとめたのが表3である。

表1 平成16年度卒業生 在学中の図書貸出冊数

学科	在学期間	専攻コース名	人数	貸出冊数/n	1年間平均	最大	最小	0冊人数	0冊%
家 政 2年		生活デザインコース	5	1.8	0.9	7	0	3	60.0
		保健養護コース	46	12.1	6.1	57	0	6	13.0
		生活福祉コース	30	4.5	2.3	26	0	11	36.7
		食物栄養専攻	59	26.1	13.1	102	0	3	5.1
幼児教育 2年		幼児教育コース	62	15.4	7.7	104	0	5	8.1
		福祉心理コース	42	14.1	7.1	57	0	2	4.8
看護 3年			53	59.3	19.8	192	6	0	0.0
専 攻 科 1年		地域看護学専攻	16	25.1	25.1	57	1	0	0.0
		助産学専攻	8	31.1	31.1	52	17	0	0.0
		福祉専攻	13	3.2	3.2	16	0	6	46.2
		全 学 科	334	19.3	11.6	192	0	36	10.8

※留年・休学・復学等，学籍に異動のあった学生は除いた。

表2 館種別の貸出冊数

館 種	館 数	学内利用者数	うち 学 生	学生貸出冊数	学生個人平均
国 立 大 学	283	1,303,448	1,035,383	5,922,349	5.7
公 立 大 学	101	251,322	169,123	1,511,297	8.9
私 立 大 学	846	4,955,436	4,391,015	15,836,856	3.6
短 期 大 学	256	201,099	166,929	995,884	6.0
高 専	56	63,817	54,867	451,774	8.2
飯田女子短期大学					11.6

※参考『日本の図書館2004』・『平成17年度私立短期大学図書館情報担当者研修会資料集』

表3 看護学科学生の図書貸出冊数

(卒業年度)	1学年	max	min	2学年	max	min	3学年	max	min	合計平均	最大	最小
1期生 (1999.3)	—	—	—	—	—	—	12.1	41	0	—	—	—
2期生 (2000.3)	—	—	—	11.5	59	0	22.2	105	0	—	—	—
3期生 (2001.3)	13.8	66	0	28.8	87	0	31.3	115	0	73.9	237	4
4期生 (2002.3)	9.6	33	0	16.3	62	0	37.4	100	0	63.2	192	7
5期生 (2003.3)	10.5	54	0	20.5	79	0	39.6	88	7	70.6	186	12
6期生 (2004.3)	8.7	55	0	21.1	83	0	27.3	76	8	56.7	173	10
7期生 (2005.3)	15.1	52	0	17.1	74	0	27.1	74	4	59.3	192	6
平 均	11.5			19.2			28.1			※59~65		

一期生の1・2年次および二期生の1年次のデータは，2005年現在では抽出が不可能であるため集計できなかった。

3年間に在学し，卒業した学生を対象とし，在学期間中に留年・休学・復学等の異動があった学生は除いた。

※三期生以降の平均は65冊，一・二期生のデータを加えると平均は59冊になる。したがって，1年間の貸出冊数は，三期生以降では21.7冊，一期生からでは19.7冊であった。

表4 看護系私立短期大学図書館の貸出冊数

ID	一日平均貸出冊数	開館日数	[年間貸出冊数]	奉仕対象者数	[貸出冊数]
1	46.2	196	9,055	561	16.1
2	17	212	3,604	542	6.6
3	12.7	261	3,315	395	8.4
4	63.6	271	17,236	681	25.3
5	8.6	253	2,176	398	5.5
6	71	231	16,401	223	73.5
7	20	255	5,100	811	6.3
8	65	281	18,265	968	18.9
9	32	270	8,640	456	18.9
10	58	267	15,486	422	36.7
11	34.4	215	7,396	759	9.7
12	10	235	2,350	702	3.3
13	51	268	13,668	1,517	9.0
飯田女子短期大学					18.3

※『日本看護図書館協会2003年度会員実態調査報告』より・[]の項目は筆者による。

※奉仕対象者数は図書館によっては教職員を含むとも考えられるため学生の貸出数としてよいかは不明である点を留意したい。

看護学科生の1年間の平均貸出冊数は19.7冊（三期生以降では21.7冊）となった。その平均貸出冊数には、設置当初から大きな変動はないと考えられる。また、看護学科一期生から在学中の貸出図書冊数0冊の学生はいないが、学年ごとのデータを見ると3年次については五期生（平成12年入学）以降から0冊の学生がいなくなっていた。

看護系図書館における貸出については、日本看護図書館協会2003年度会員実態調査報告¹⁰⁾の私立短期大学図書館13校のデータをもとに貸出冊数を算出したのが表4である。

各図書館により大きな差異があることがわかったが、平均貸出冊数は18.3冊であることから、本学の19.7冊は、ほぼ平均的な数値であることがわかった。

さて、1年次11.5冊、2年次19.2冊、3年次28.1冊、計58.8冊と学年があがるごとに貸出冊数が増加しているため、学年ごとの貸出の特徴を「貸出図書ベスト30」の出力結果によって比較をした。出力した図書の平均貸出回数をまとめたものが表5である。

表5 看護学科学年別「貸出図書ベスト30」の結果に表われた図書の平均貸出回数（回数）

	看護1年	看護2年	看護3年
2000	2.3	3.5	7.7
2001	2.4	6.6	7.7
2002	4.1	3.7	9.2
2003	3.9	4.5	5.2
2004	2.7	3.7	5.9
平均回数	3.1	4.4	7.1

平均は、1年次3.1回、2年次4.4回、3年次7.1回であり、学年があがるごとに同じ本が何度も貸出されていることがわかった。また、年間の貸出が3回以上あった図書の冊数を表6にまとめた。

平均で1年次44.0冊、2年次81.0冊、3年次205.8冊と、やはり学年があがるごとに3回以上貸出のあった図書が増える傾向であった。

これらのことから、入学当初の図書館の貸出利用は、学生個々の関心・興味による借出しのニーズであったが、学年があがるごとに、

表6 看護学科学年別「年間貸出3回以上の図書」の冊数

	(冊数)		
	看護1年	看護2年	看護3年
2000	22	63	228
2001	65	122	197
2002	49	70	296
2003	28	63	177
2004	56	87	131
平均回数	44	81	205.8

共通した分野の資料を求める傾向にあるといえる。このことは「同じ本を何人もの学生が帯出する」ということと「同じ本を同一の学生が何度も帯出する」という両方の利用が考えられるわけであるが、図書館ではこれらの結果を、館内で見かける看護学科生の動向とあわせて、看護学科の教育方法や教育内容と関連していると推測している。特に3年次は、実習を中心とし、卒業研究を必修とし、看護師国家試験対策学習など、グループ・ゼミナール・個人を単位とした看護の専門分野の学習を展開するといった他学科にないカリキュラムの特徴があり、そのことが学習を中心とした貸出利用へと変化させていると考えられるのである。

しかし、このように図書館側から考える学生像に加えて、教員がどのように学生を理解し、評価しているか考えてみる必要がある。そこで、関係教員に対してアンケート調査を実施して、その結果を次にまとめた。

2. 教員アンケート調査

1) 方 法

(1) 調査対象

平成17年度看護学科生の講義を担当する専任教員32名

(2) アンケート期日

平成17年7月5日配布 7月15日回収

(3) 回収率およびアンケート内容

回答：22名(回収率：69%)

アンケートの目的は、教員の視点と図書館員の視点の相違を見つけることである。また、回答は記名式とし、アンケート調査用紙には、前出の平成16年度卒業生の図書貸出冊数の集計表と看護学科生の経年の図書貸出集計表とを平均値に標準偏差値を加えたデータを資料として添付した。

アンケート用紙は資料1として巻末に添付する。

2) 結果および考察

添付したデータの印象について回答を求めたところ、

問1：看護学科生の図書貸出冊数は、多いと思いますか、少ないと思いますか？

多 い 6名
少 ない 10名
無回答 6名

であり、「少ない」と回答した教員のほうが多かった。実習中の患者指導や卒業研究について考えるならば当然テキスト以外の資料が必要になるはずだという記述をしている。「多い」という回答については、他の学科との比較をして図書館をよく利用しているという評価の記述や、貸出冊数よりもどのような利用をしているかが問題ではないかという指摘があった。

では、教員側が図書館の利用についてどのくらい指導しているかということについては、問3：講義や実習の中でテキスト以外の資料を用いた調査を課すことや、図書館の利用を促す内容をともなう話などを行ったことがありますか？

あ る 17名
な い 5名

であり、「ある」の回答の多さは、前項の問との関連を感じさせており、指導のわりには図書館の利用をしていないといっているように思われる。

問4：卒業研究の指導をしていますか？

している 11名

していない 11名

問4-1：卒業研究の指導の中で、図書館の利用を促すような指導がありますか？

あ る 11名

な い 0名

このことから、卒業研究の指導の中では必ず図書館を利用することが指導されていることがわかった。その指導の方法について学科設置当初より変化が生じたという回答はなかった。また一期生から四期生までの3年次に貸出冊数が0冊の学生がいたこと自体を考えられないという声もあった。

では、五期生あたりから、3年次の貸出冊数0冊の学生がなくなり、貸出冊数の開きが少なくなっている均質化傾向の現象については、

- ・四期生以降のカリキュラムの変更
- ・学内講師制度（平成11年度）により指導者数の増加とそれに伴う指導方法の多様化
- ・国家試験合格率の低迷（三・四期生に不合格者があったこと）
- ・五期生あたりからの退学・休学者の減少が指摘されていた。

これらのことは、図書館では思いつくことのできなかった学科内の状況や変化である。そして、これらのひとつひとつがどのように影響したかは不明であるが、これらのことが図書の貸出冊数に影響をあたえているのではないかと教員の視点とすることができる。

また、教員の指導の問題ではなく、学生の気質そのものの変化があるかもしれないことについては、

- ・設置当初の学生のほうが、資料の活用が上手にでき、思考に深まりや広がりを感じられた学生が多かったのが、最近の学生は資料に書かれている内容を吟味する読解力の乏しい学生が見受けられる。
- ・自分の考えを書くレポートを課しているが、設置当初の学生は資料の丸写しをする学生に困った。そのことは指導によって改善で

きたが、最近では文章力が著しく低下したレポートになり閉口している。

などと、寄せられた意見は、以前の学生のほうが評価が高い、あるいは学生には当然能力の高い学生と低い学生がいるが、以前に比べると最近のほうが全体的に評価の低い学生が多い印象にある、と評価していた。

図書館の貸出冊数は良好であるうえ、どちらかといえば貸出利用をしていない学生がなくなり、学習支援が全ての学生に行き届くようになったと評価したいと考えられるのに、学生の能力の評価が低いという教員の意見である。このことについて、

- ・大学生全般に、学習方法だけでなく生活全般に及ぶ細かな指導をしないといけない風潮である。その結果として「あれもこれも読みなさい」という指導も増えているのではないか。つまり図書館内閲覧で済んでいた資料も貸出すようになっているのではないか。

という意見があった。

また、図書館についても、

- ・年々資料が充実してきた。
- ・利用しやすい環境である。
- ・金曜日の時間延長によって利用が増えた。
- ・インターネットの時代になり、文献調査が容易になり、活用が増えた。

という記述があった。

近年の情報化に対応した図書館の環境の変化は、図書館側が最も注目していた項目であり、情報化による教育方法の変化を予測していたが、今回のアンケートの回答から、そのことに触れた回答は少なかった。また、次に述べる図書館ガイダンスについても、学生が図書館を身近に感じるために必要であると3名が記述していたが、本学の図書館ガイダンスの内容を把握していると思われる教員は1名であり、貸出冊数との関連を指摘した教員はいなかった。その点においては教員と図書館との意識の乖離を感じた。

では、学生たちは図書館をどのように見ているのだろうか。教養講座を通して行ったアンケートについて、次に報告する。

3. 看護学科1年次の教養講座参加者 アンケート調査と貸出冊数

本学看護学科では教養講座を水曜日の2時間目の全学集会後のゼミナールに変えて行われる。卒業研究のための図書館の利用と書誌情報の検索に関する講義「情報の集め方 検索のしかた」は平成13年度より時間数を増やし、図書館の利用の実際についての館内ガイドが企画された。平成14年度からは図書館への要望や購入希望図書・ガイドの感想などを聞き、学生像の把握と図書館の運営の参考にしたいと考えアンケート調査を行うことにしている。アンケート用紙は資料2として巻末に添付する。

1) 方 法

(1) 調査対象

平成14年度参加者 51名
平成15年度参加者 61名
平成16年度参加者 56名

(2) 調査期日

平成14年6月26日
平成14年7月3日
平成15年6月18日
平成15年6月25日
平成16年6月16日
平成16年6月23日

(3) 館内ガイドの方法とガイド終了後のアンケートによる評価

平成13年度の図書館ガイドは、データベースの検索を中心とした説明を行ったが館内には検索用機器類が少ないこともあり、散漫な内容になってしまった。そこで、このガイドの目的を、機器の操作方法の習得や館内の案内に終始するのではなく、看護学の学問領域の広さを示すこととした。小規模な図書

館であっても、やみくもに探すことがいかに困難であるかを体験し、請求記号や検索データから配架場所を読み取り、書架にいくことがいかに効率がよいかが体感できるよう考えた。最初に全員に自動貸出返却装置を利用した貸出と返却についてデモンストレーションをし、ブックディテクションの仕組みを説明する。その後館内の資料と機器の説明をして一巡する。そして、検索機の操作と検索結果の読み方と資料の配置の関係を説明する。その後学生たちは配布した用紙に列挙した請求記号と書名の一覧をもとにして、資料をできるだけ多くみつめる作業に入る。その際、資料の配架場所を動かさないことにする。また、時間内に全部を見つけることが目的ではなく、探し出した資料の周辺にどのような資料があるかも見渡し、ブラウジングすることの大切さも指示した。ひとりで探しても、グループで探しても、わからない場合には教えあってもよい。探す資料は、看護学および周辺領域のものであるが、看護学を学ぶということは、NDC分類の看護学492.9の書架だけではなくほぼ全体に関係していることを体感してもらう。したがって、学生は心理学・社会科学・技術工学・文学など館内をくまなく歩くことになる。その間、司書は学生個々に声をかけ、文庫・新書の別配置やラベルの意味や書架ごとの配列について説明をしていく。読書談義になることもある。終了10分前に配布資料の裏面のアンケートに回答して提出し終了するよう指示している。このガイドについての感想は、・面白かった・館内がよくわかった・これからひとりでも利用できそう・面白そうな本があることがわかった・在学中にたくさん利用したいなど、おおむね学生に好評であり、丁寧に記入されたアンケートを回収することができた。

このアンケート調査から、自己評価による入学前の学生像を群に分け、在学中の貸出冊数からみた本学の学生像を考察した。

2) 結果および考察

アンケートの回答から学生の入学前の読書嗜好と図書館利用嗜好を次の6群に分けた。

- 1群 図書館の本をよく読み、図書館で学習した。
- 2群 図書館の本をよく読んだ。しかし、図書館で学習することはなかった。
- 3群 読書は好きだが、図書館の本は利用しなかった。図書館で学習をよくした。
- 4群 読書は好きだが、図書館の本は利用しなかった。図書館で学習することはなかった。
- 5群 図書館の本は利用しなかった。読書にも興味がない。しかし、図書館で学習をした。
- 6群 図書館の本は利用しなかった。読書にも興味がない。図書館で学習することもなかった。

このカテゴリーごとの在学中の貸出冊数について学年を追ってまとめたのが表7である。

嗜好の尺度は、個人的で利他的な感情である自己評価であるため、実際の行動との差もあるであろうし、出身高等学校の図書館の事

情も異なっていると思われるが、この結果をもとに考察をしてみたい。

本学看護学科入学生の入学時の読書嗜好と図書館利用嗜好は、平成14年度と平成16年度では上位のカテゴリーの群が多く、平成15年度ではあまり図書館を利用しなかった学生やあまり本を読んでいない下位の学生が多かった。このことから、読書嗜好や図書館利用嗜好における学生像は、年度によりバラツキがあると考えられる。

しかし、入学以前に図書館の本をよく利用し、図書館で学習する習慣があった学生は、本学入学後の図書館の貸出冊数が多い。つまり、1年次の図書館の貸出冊数は、高校時代の図書館の利用習慣が反映されていると思われる。反対に図書館の本を読むことに興味のない学生は図書館にも興味がなく、必要にせまられなければ利用しないと考えられる。また、3群と5群のように図書館の閲覧席のみ利用するという学生は、図書館の本を借りるという気持ちにならないと考えられる。もし、学生個々の行動がわかるなら、これらの群の差がどのようになるかは興味深いところである。

表7 教養講座参加者の入学前までの読書嗜好と図書館利用嗜好と入学後の平均図書貸出冊数

		(冊数)									
カテゴリー		2002年 (%)	1年次 の貸出 冊数	2年次 の貸出 冊数	3年次 の貸出 冊数	3年間 の貸出 冊数	2003年 (%)	1年次 の貸出 冊数	2年次 の貸出 冊数	2004年 (%)	1年次 の貸出 冊数
1	図書館の本をよく利用し、 図書館で学習をした。 ○-○	14 (27.5)	20.6	19.1	33.8	73.4	12 (19.7)	26.3	21.8	19 (33.9)	17.3
2	図書館の本をよく利用し たが、図書館での学習を しなかった。 ○-×	6 (11.8)	24.3	31.3	33.2	88.8	7 (11.5)	13.4	16.9	9 (16.1)	6.8
3	図書館の本は利用しなかつ たが、読書は好きで、図 書館で学習をした。 ×○○	9 (17.6)	10.1	11.2	30.7	52.0	7 (11.5)	11.3	13.3	8 (14.2)	3.1
4	読書は好きだが、図書館 の本を利用したり、図書 館での学習はしなかった。 ×○×	8 (15.7)	15.6	22.3	26.3	64.1	16 (26.2)	10.6	16.1	14 (25.0)	6.7
5	読書はしないが、図書館 での学習をした。 ××○	7 (13.7)	9.0	14.6	24.9	48.4	5 (8.1)	10.5	13.0	3 (5.4)	7.7
6	読書をしていない。 図書館も利用しなかった。 ×××	7 (13.7)	13.6	13.4	30.3	57.3	14 (23.0)	10.8	9.1	3 (5.4)	3.7

さて、このような1年次の差と比較して、3年次の貸出冊数では6群間に差がないことは注目される。

これまでの調査結果で明らかなように、1年次の図書館の利用は、個人の興味を中心に行われてきたが、学年があがると実習や卒業研究のため、学生にとって図書館資料の利用は、教員の指導によって増加する。そして、学生も教員の指導に応えるように、前述の嗜好とは関係なく、図書館を頻繁に訪れることになっていると考えられるのである。

つまり、図書館の評価の目標とする「学生の学習に寄与する」学習支援としての図書館機能のニーズが確認できるのである。

4. 開館時間延長試験試行調査結果

本学図書館の現在の開館時間は閲覧規則によりA.M.8:45からP.M.5:00である。また、館長の裁量により、学則による就業日の金曜日についてはP.M.6:30まで、前後期の定期試験前1週間をP.M.6:00まで開館時間を延長している。また、第2週と第4週以外の土曜日については希望開館日としている。ここに至る経過を報告する。

実習を中心とした平成11年度の看護学科3年次のスケジュールでは実習期間中の図書館利用時間の確保が困難であるという理由で、開館時間延長の要望があった。これまで、小規模校の小規模図書館である本学図書館は、時間外開館の希望に対しては臨機応変に対応してきたが、多くの学生の生活は第1時限から5時限目まで講義・実習があり、単位を多く履修する学生ほど、放課後に図書館の利用ができないという声もあった。図書館としては平成8年度の学則変更により土曜日休業となったとき、学生サービスの視点から土曜閉館の決断を半年延ばし、学生の利用状況をみて希望開館へ移行した経緯がある。しかし、土曜日来館者は少なく、平日においては、閉館後のデータバックアップ等の処理時間の確

保、学生や職員の帰宅の安全の確保などの、不安材料があった。そこで、平成12年度の図書・学術委員会は、25日間の試行期間を設けて調査を実施した。この結果、閲覧規則を改正するまでには至らなかったがこの経緯を報告する。

1) 方 法

(1) 調査対象日

平成12年5月から9月の25日間

月曜日 13回

金曜日 12回

看護学科3年生の実習は12グループで行われた。実習病院での実習グループと学内待機グループとがある。5ヶ月の実習期間のうち学内待機が3週間あり、毎水曜日は帰校日であるため図書館の開館時間延長が必要なのは、新担当患者が決定する金曜日の5時以降と、担当患者にはじめて対応した月曜日の帰宅後であるという学科の申し出により設定した。

(2) 調査の方法

図書・学術委員と司書とが交代で6時半まで開館した。利用者は図書館利用カードに記入して利用を許可した。記入項目は、利用月日・入退館時刻・学生の所属・氏名のほか利用目的(複数回答)と要望である。利用の範囲は、館内資料や閲覧席を利用した学習と館内資料の複写のみ許可した。委員の当番の時には貸出は行わなかった。また、第1回目の5月8日には19名の利用者がいたことが確認できたが、利用カードへの記入を指示しなかったため、集計は24日間となっている。

2) 結果および考察

24日間の入館集計結果を、表8にまとめた。利用者数は、のべ435名であった。1日平均18名の学生が利用しており、7月7日の利用者1名(利用目的:本の返却)の日をのぞき、「延長の必要を認める」と担当委員は回答した。

調査の主体となった看護学科3年生65名の動向は表9にまとめた。

表 8 開館時間延長試行期間の利用集計

	5月12日	5月15日	5月19日	5月22日	5月26日	5月29日	6月2日	6月5日	6月9日	6月12日	6月16日	6月19日	6月22日	6月26日	6月30日	7月3日	7月7日	7月11日	7月14日	7月18日	7月21日	7月25日	7月28日	8月1日	8月4日	8月8日	8月11日	合 計
利用者数 合計	26	12	20	18	25	34	21	24	35	18	14	13	21	14	14	16	1	12	16	10	15	22	11	23	435			
5 時前から継続利用者数	11	6	15	0	13	24	15	4	12	5	12	3	9	4	3	4	1	11	14	8	12	9	9	13	217			
家政学科 1 年							2				2							3		5	2	2		1	17			
家政学科 2 年	1	3				3	7	3	2	4	4	2	1			1		1	5		5	5	1	3	51			
幼児教育学科 1 年				1								1		1		3						2		1	9			
幼児教育学科 2 年					6	21			5	1	5		1	2	1									1	43			
看護学科 1 年				5		1		1	3			1					1	6		3	3		4	6	34			
看護学科 2 年								1						1	2				5				2		11			
看護学科 3 年	5	3	7		5	2		2		1		6						1	4		2		1	1	40			
専攻科地域	1		2		1																		1		5			
専攻科助産																												
5 時以降来館者数	15	6	5	18	12	10	6	20	23	13	2	10	12	10	11	12	0	1	2	2	3	13	2	10	218			
家政学科 1 年											1		1	2		1						2			7			
家政学科 2 年			1	1		1	4		4	1		1	1			1								6	21			
幼児教育学科 1 年										1						1									2			
幼児教育学科 2 年	1				2				2				3	2	3										13			
看護 1 年	1		2	3		2		2		1				1	4								1	3	20			
看護 2 年								1		1		1				1		1	1			3			9			
看護 3 年	11	5	2	14	9	8		17	16	11		8	7	5	6	4			1	2	3	8		1	138			
専攻科地域	2						4																1		7			
専攻科助産				1		2								1	1										5			
利用目的																												
図書の返却	1	0	2	0	1	2	3	0	0	1	0	2	4	0	2	3	1	0	2	1	1	2	0	0	28			
館内資料の閲覧	17	11	18	12	21	19	10	20	25	16	3	9	18	8	11	8	1	12	10	1	5	10	8	13	286			
館内資料の複写	8	6	10	7	6	7	1	9	15	9	1	4	8	8	3	3	0	6	0	1	4	5	2	6	129			
実習担当患者の病理等の調査	12	5	5	5	8	6	4	10	11	7	2	3	9	4	1	1	0	2	2	2	2	4	0	0	105			
視聴覚資料の館内視聴	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	3	0	0	0	6				
インターネット利用	3	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	8			
卒業研究・レポート作成等学習室として	7	6	6	2	6	9	10	2	9	5	7	2	3	2	1	3	1	5	9	5	9	12	7	13	141			
その他	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	3	0	0	0	0	0	9			

看護学科 3 年生は、24 日間にのべ 178 名来館し、24 日中 2 回来館した学生が最も多く 14 名いた。次いで 1 回の 13 名であった。6 月第 2 週目が最も多く、夏休み以降は少なかった。

5 時前に申し出のあった利用者への対応は、適宜対応するこれまでの体制でよいと考えている。

5 時以降来館した学生は全体で 218 名 (50 %) であり、うち看護学科 3 年生は 138 名であった。

また、今回の調査で最も注目していた来館理由 (複数回答) の「実習担当患者の病理等の調査ため」は 105 件あり、全体の利用者の 24.1 % (105/435) であった。105 件中看護学科 3 年生の回答は 91 件で、看護学科 3 年生の来館学生の 51 % (91/178) であった。そして看護

学科 3 年生の利用 178 件のうち 21 件は学内待機期間中の利用であった。また、一度も来館しない学生は 7 名 (10.8 %) であった。

これらの結果により、必要ではないかと考えた学外実習中の学習支援のためのニーズは、調査前に比べて不明確となった。

開館時間延長は、全学科共通した課題であり、看護学科のみの教育支援という意味で決定するべきではないであろう、という見解となった。しかし、今後とも学生の学習支援の場所、情報の提供という機能のニーズに対応して便宜をはかっていかねばならないことは確かであった。

これらの調査と検討によって、平成 13 年度から金曜日を P.M.6:30 までとし、月～木曜日までは希望により P.M.6:00 までとした。

表9 開館時間延長試行期間の看護学科3年生の利用状況

学生 I D	班	5 月					6 月					7 月			8 月			9 月			合計					
		12	15	19	22	26	29	2	5	9	12	16	19	23	26	30	3	7	21	25		28	1	4	8	11
1	10															○										1
2	11																									0
3	8	○		○									○													3
4	7																									0
5	2		○			○																				2
6	5								○	○											○					3
7	6						○		○	○	○															5
8	1									○			○	○												3
9	12												○	○	○					○			○		○	9
10	6				○	○	○		○	○																5
11	10				○									○	○	○	○									5
12	7						○														○					4
13	3		○		○																	○				4
14	4							○			○															2
15	9				○																					1
16	12																									2
17	1							○	○																	2
18	2					○																				1
19	3		○		○																	○				4
20	2		○		○																					2
21	1	○							○				○	○												5
22	3		○																							1
23	9				○		○				○				○											4
24	6				○	○	○		○	○	○															6
25	9				○						○															3
26	2	○				○																				2
27	4								○		○													○		3
28	8				○								○													2
29	12															○										1
30	11																									1
31	10	○	○		○		○									○	○									6
32	11																									1
33	4								○		○															2
34	10	○		○										○	○	○	○									6
35	2	○				○																				2
36	5				○					○																3
37	4								○																	1
38	12																									3
39	1								○	○	○		○	○												5
40	8			○																						1
41	1								○	○	○															4
42	7				○		○																			5
43	4	○							○	○		○														4
44	5									○																1
45	9				○																					2
46	3	○	○	○																						5
47	5									○																4
48	8				○																					2
49	3	○	○	○	○																					5
50	6						○		○	○	○															5
51	10																									0
52	6						○		○	○																3
53	10	○			○		○				○				○	○	○									7
54	5								○	○																3
55	7					○																				1
56	8	○		○											○											3
57	9	○			○				○																	3
58	11									○																1
59	7																									0
60	9																									0
61	7																									1
62	4																									0
63	12														○									○		2
64	2					○																				1
65	1																									0
合計		15	9	8	15	13	8	2	17	18	11	1	9	12	6	6	4	0	1	5	2	5	9	0	2	178

■は学内待機日。班によっては実習に入ってから実習スケジュールが確定したため、試行前には不明な部分がある。

表10 学外利用者の推移（のべ人数）

平成12年度	46名
平成13年度	59名
平成14年度	50名
平成15年度	56名
平成16年度	90名
平成17年度	89名

その希望状況をもて、平成15年度からは定期試験前1週間をP.M.6:00までとした。これらの開館時間延長は前述のように、館長裁量の範囲で行っている。

5. 公開講座受講者アンケート調査

学生の利用について述べてきたが、近年では大学を地域にひらく需要が高まっている。

本学図書館の学外者の利用に関する規定は、閲覧規則に定められており、本学関係者以外は館長の許可により利用することができる。平成12年度以降の利用者数を表10にまとめる。

本学図書館の学外者の利用は、看護系外来者が多く、利用者の3分の1は看護学科卒業生であった。看護の現場では看護研究が職務として課せられており、様々な研究・テーマをかかえて来館される。近くに看護系図書館がないこともあり、本学図書館は十分充実した資料を所蔵する図書館ではないが、このようなニーズに少しでも役立ちたいと考えている。しかし、この学生のための施設を、このまま地域に公開することは当然混乱が予想される。そこで、本学公開講座の受講者を、地域住民の代表と考え、本学生涯学習センター

を通じて、公開講座受講者にアンケートをお願いした。

1) 方法

(1) 調査対象

平成15年度公開講座受講者のべ153名

平成16年度公開講座受講者のべ299名

(2) 回収

受講者には、生涯学習センターによるアンケート用紙が配布され、講座終了時に回収が行われている。提出は任意である。図書館からのアンケートはその裏面を利用した。フェイスシートは生涯学習センターのアンケート部分を利用し、図書館からのアンケートであることは明記しなかった。アンケートを資料3として巻末に添付する。

2) 結果および考察

本学公開講座の受講者の性別構成は、女性394名・男性54名・無回答4名である。年齢構成は、20歳未満3名・20歳代49名・30歳代97名・40歳代72名・50歳代108名・60歳代84名・70歳以上37名・無回答2名であった。

興味の分野をNDC分類に本学公開講座の内容を含めて24項目にして複数回答で回答を求めた結果が表11である。「心理学」「福祉」「医学看護」「食品栄養」「調理」「服飾手芸」「育児保育」が多かった。

次に、「興味を持っている分野について本やインターネットなどで調べるなど、自分で学習することがありますか」について、「ある」は223名(49.3%)、「ない」は94名、「無回答」は135名であった。

表11 公開講座受講者の興味の分野（複数回答）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
分野	哲学	心理学	宗教学	歴史	地理	政治・経済・法律	生活・消費者	女性	福祉	教育	民俗	物理・化学	生物	医学・看護	食品・栄養	料理	服飾・手芸	育児・保育	産業	芸術	スポーツ・諸芸	言語	文学	情報
人数	37	157	79	66	14	26	63	40	127	60	30	9	20	110	134	131	99	104	4	76	48	62	46	33

表12 主体的問題解決志向型の割合

[性 別]			
性 別	回答者数	受講者数	割 合 (回答者数/受講者数)
男 性	30	54	55.6
女 性	191	394	48.5
[年齢別]			
20歳未満	2	3	66.7
20 歳 代	36	49	73.5
30 歳 代	50	97	51.5
40 歳 代	43	72	59.7
50 歳 代	51	108	47.2
60 歳 代	30	84	35.7
70 歳 代	10	37	27.0
無 回 答	1	2	

「ある」と回答した人は問題解決に対して主体的であると考え、主体的問題解決志向型とし、それ以外を依存的問題解決志向型と仮名してみた。主体的問題解決志向型群223名の性別と年齢構成は、表12である。

受講者の構成からその割合を比較してみると、性別では男性が多く、年齢別では50歳代から下り坂になっている傾向があった。

主体的問題解決志向群の興味の分野を表13

表13 主体的問題解決志向の受講者274名はどのような分野に興味があると回答しているか

(複数回答)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
分	哲	心	宗	歴	地	政治・経済・法律	生活・消費者	女	福	教	民	物理・化学	生	医学・看護	食品・栄養	料	服飾・手芸	育児・保育	産	芸	スポーツ・諸芸	言	文	情
野	学	学	教	史	理			性	祉	育	俗	学	物	学	品	理	芸	業	術	芸	語	学	報	
人数	21	89	37	31	11	12	31	20	73	28	21	5	14	53	67	79	64	64	3	59	28	43	26	20

表14 「図書館をよく利用している」群と「主体的問題解決志向型」群のクロス集計表

	主体的問題解決志向型	依存的問題解決志向型	合 計
どちらかといえば図書館を利用している	168	55	223
どちらかといえば図書館をあまり利用していない	106	123	229
合 計	274	178	452

(p<0.001)

に示す。受講者全体の散らばり具合と大きな差がないと考えられる。

また、受講者は公共施設・文化施設である公民館や体育館・グラウンドなどのスポーツ施設や図書館を利用しているかどうか回答を複数回答で求めた。よく利用すると回答したのは、

公 民 館 80名 (17.7%)

図 書 館 120名 (26.5%)

スポーツ施設 37名 (8.2%)

であり、公開講座受講者にとって図書館は身近なものになっていると思われる。

図書館利用についての詳細は、

よく利用する 120名 (26.5%)

時々利用する 154名

あまり利用しない 66名

無回答 112名

であった。「よく利用する」と「時々利用する」を「利用している群」と考え、

どちらかといえば利用している 274名

どちらかといえば利用しない 178名

とした。この2群と前述の問題解決志向型の2群との関係を表14に示した。χ²乗検定を

表 15 「主体的問題解決型」で「図書館を利用している」受講者168名はどのような分野に興味があると回答しているか

(複数回答)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
分野	哲	心	宗	歴	地	政治・経済・法律	生活・消費者	女	福	教	民	物	生	医	食	料	服	育	産	芸	ス	言	文	情
人数	17	64	31	20	5	8	25	18	51	24	15	2	9	36	57	64	49	52	3	42	22	34	18	12
問題解決志向型 と興味 の有意差		*							*		*					**	**	**		***		**		
図書館利用と 興味 の有意差	*	**	*			*		*		*	*				***	***	***			***		*		

行ったところ、問題解決志向型群と図書館利用群に、有意差があり ($p < 0.001$)、主体的問題解決志向群には図書館を利用する傾向があることが確認できた。

本学の公開講座受講者452名の中で、主体的問題解決志向型であり、どちらかといえば図書館を利用している人は168名 (37.2%) である。この168名の興味の分野を表15に示した。

本学公開講座受講者を地域住民が本学図書館を利用する可能性の高い集団と仮定し、その集団が本学の図書館に期待する資料は、特に「心理学」「民俗」「料理」「服飾・手芸」「芸術」「言語」の分野であると考えられよう。しかしこの点については、この興味の範囲が果たして資料に結びつくかどうか疑問であること、この調査が図書館の公開を検討するため図書館が行っていることを明示しなかったことにより、回答者は生涯学習センターの企画への要望と捉えたと思われるなど、「興味」の結果には若干の問題を含んでいるものと考えている。

このような調査は、看護師など特定の職業

集団を対象に行うことや、近隣の公共図書館との連携を意識した調査に発展させ、図書館の地域公開が地域にとっても本学にとっても意義のあるものになるかどうかを、体系的・組織的に検討していかなければならないと考える。

「地域開放」は「地域連携」であり、これまでの本学図書館サービスが中心としてきた「教育・研究活動との連携・支援」とは、異質な課題をもっていると考えている。

考 察

本稿で報告する調査は、看護学科生を対象としている。これは看護学科生の貸出冊数の集計に特徴があったからであった。しかし、本学看護学科生の図書館利用の動向に影響を与えたと考えられる要因として次のことが考えられる。図書館長職を看護学科長が兼務していたこと、看護学科の教養講座の図書館ガイダンスによって図書館との関わりがあったこと、開館時間延長の希望を通して学科と図書館との関わりがあったこと、病院実習へ学生がお世話になることを通して病院の看護ス

スタッフから図書館利用の申し出が顕在化し、地域への開放について考える道筋が図書館にできたこと、情報に関する生涯学習センターの公開講座に図書館員が関わる機会があったこと、そして、看護学科3年次の特徴的なカリキュラムに加えて、図書館のスタッフが看護学科生の情報科学の講義を担当し、情報化社会の諸相や文献収集について学生に直接指導する機会があったことという背景である。

しかし、本学は看護学科だけではなく、家政学科・幼児教育学科とそれぞれ特徴をもった教育を行っており、図書館もまた、それぞれに異なるかかわり方をしている。

これまでのべた5つの調査の結果をどのように捉えて、図書館サービスの評価に活用していくかという観点から、観点を变えて図書館の機能である「学習支援」「読書支援」「学習環境支援」の面から考察する。

1) 学習支援－貸出冊数の統計で見えてきたもの・見えないもの－

利用者の図書館利用の目的は多岐にあり、貸出冊数のみで利用者像を求めることは適切ではないと考える。

たとえば、視聴覚資料の利用や、禁帯出資料の利用、学習室としての図書館の利用は、統計処理のできない図書館利用の形態である。図書館資料の貸出冊数が少ないからという理由で、図書館を利用していないと評価するわけにはいかない。

学科・専攻・コースごとの特徴ある学習内容への学習支援としては、図書館利用の形態のニーズを把握したうえで調査を行い、評価せねばならない。

そのためには、直接の学習の指導者である教員が、どのような人間形成を目的として、学習場面の中に図書館を位置づけているかを、図書館は知らねばならないのである。

今回、貸出冊数をいろいろな角度から処理していくことによって、本学の看護学科生の図書館との関わり方や、学習への取り組み傾

向の一端を明らかにできた。

図書館は教員と学生との間にあって学習支援のための学術情報のコーディネート役割を遂行していかなければならない。学生が求めている情報と教員が提供している情報とが質的・量的に期待を満たすものであり、両者のニーズに基づく学習支援が行われることが望ましい。

図書館の利用時間の延長についても、学習支援のひとつであり、学習場所の提供になる。このことは学習の成果としてどのように表れ、時間的、空間的、機能的視点から、図書館をどう評価することになるであろうか。その見えない部分をどのように補っていくかが今後の課題であろう。

学習支援に関する図書館の機能は、在学中の貸出冊数統計を教員がどのように評価するかという視点によって行っているが、学生の学習の成果との関連において評価するべきであり、さらにその成果をのばすために、今後の教員との連携のあり方がひとつの課題である。

2) 読書支援－利用ガイダンスより、学生の読書嗜好と図書館の利用との関連を考える－

入学時の一斉オリエンテーションに企画された15分ほどのガイダンスは、新入生には漠然とした印象になっているらしい。

看護学科1年次の6月に行うガイダンスは、おおむね学生に好評であると報告したように、図書館にとっても、入学してあたりを見回すゆとりのできたこの時期の学生たちの声は、参考になっている。

「これから利用したい」などは、入学以降環境の変化に戸惑い、頭の隅に忘れ去られた図書館が、ガイダンスによりその存在に気づいたと解釈することもできよう。図書館ガイダンスは、これまで家政学科・幼児教育学科で行われていない。そのことが、貸出冊数に影響を及ぼしているか否かということは不明である。しかし、今後は図書館の役割と利用

方法を知り、有効に利用してもらう努力をする必要があると考える。

平成18年度から各学科に委員会を通じて呼びかけ、ガイダンスの機会を設けるよう働きかけていく。その実施によって貸出利用統計に変化が起こるようであれば、このガイダンスは読書支援として有効であることが明確になるであろうが、そのことは今後の課題である。

また、今回の調査により、入学前に形成された読書嗜好と図書館の利用嗜好とによって、在学中の図書館利用が関連してくることも明らかにできた。

全入学時代と呼ばれるこれからの大学生は、これまでの「学生は本を読む者」という学生像と異なり、読書にあまり興味がないと回答する学生がいることも、調査結果が示している。「学生の嗜好にあう楽しく豊かな読書材を幅広く用意して、読書習慣形成の環境の提供を」という収集方針にも、配慮していく必要があろう。

平成17年度の図書・学術委員会は『読ままいか』（この地方の方言で「いっしょに読みましょう」という意味）という教員による読書推進運動を開始した。シラバス本ではなく、学生に読んでほしいと思う本についてジャンルを問わずに毎月紹介していくことにした。『読ままいか』に掲載する本は、図書館に備えることにした。ロビーの掲示・図書館入り口の掲示・書架への掲示を行っている。

読書好きな学生と教員とが本を通してコミュニケーションをもつことを支援することは、図書館の機能として重要なことではないかと考える。また、本を読むことが苦手な学生や何を読むべきかわからない学生も、本を手にするきっかけになればと願うのである。

3) 学習環境支援－情報化社会に図書館を開くということ－

近年の大学を取り巻く情報化社会の変遷は目覚ましく、学術情報をいかにして学生や教

員に提供していくかという学習環境の整備は、図書館の今日の課題である。

本学図書館は、図書館管理システム導入以来、計画的に学術情報の処理と提供のシステムを整備してきた。

国立情報学研究所学術コンテンツ・ポータル機関定額制の利用を図り、学内LANからデータベースへのアクセスができる環境を整えた。図書館ではCAT/ILLサービスを取り入れ、ILL文献複写料金等相殺サービスに加盟して、相互協力の便宜と、整理業務の迅速化を図り、本学が地方の短期大学にあるがゆえに一層、学術情報を素早く利用者に提供できる環境を整えてきた。

これらの情報化社会の図書館機能の環境整備によって、このシステムを利用した業務は当初予測した以上の作業量と威力を発揮していると考える。小規模な図書館であっても重要な部門が成立していると認識しているのである。

先に述べた看護学科関係教員のアンケート調査では、こうした情報環境の変化に伴う学生指導の変容を意識した回答について、図書館で意識しているほどには教員から得られなかった。そのことを、教員と図書館との乖離と表現した。図書館について考えるとき、昨今の情報環境の変化を、図書館の存在そのものに影響を与えると考える図書館関係者に対して、教員は、教育の技術的な方法論の変化であり、教育・研究における図書館の存在をゆるがすことではないという両者の認識の差であったかもしれない。

さらに、情報環境の整備は、学生と教員への迅速な情報提供サービス体制の充実であるが、一方、外に向けては、国立情報学研究所を中心とした図書館ネットワークへの参加である。このネットワークを通して、本学図書館の所蔵情報が、国内の大学図書館・研究機関・インターネット利用者など学内外の多くの利用者に提供されることを可能にしている

のである。

相互協力という意味では、本学のような小規模図書館では、取り寄せる資料数が提供資料数をはるかに上回るが、年々業務量が増加している。隔年発行の飯田女子短期大学白書に報告してきた数字にみる図書館の資料を更新して巻末資料4として添付しておくことにする。

「大学と地域の連携」の課題として考えている前述の地域への図書館開放と、このネットワークへの参加とは、明らかにサービスの質が異なる。本学が所蔵するデータを必要とする方に利用していただくことと、地域のニーズに応えるための図書館づくりを目指すことの違いである。

社会的存在としての大学づくりをめざすうえで、その違いを認識して課題に取り組むことが重要であると考ええる。

本稿は、平成17年11月に佐久市で行われた長野県図書館大会の大学専門図書館部会において発表したものをもとに、さらに検討を深めたものである。多くのご助言を下さった方と各調査にご協力いただいた方々にお礼申し上げます。

文 献

- 1) 呑海沙織：利用者志向の図書館サービスー変化する利用者と図書館の関係性ー。図書館雑誌, 99 (11), pp.784-785, 2005.
- 2) 及川はるみ・上村順一・大田原章雄・堀恭子：特集「図書館のアイデンティティ」編集にあたって。情報の科学と技術, 56 (2), p.45, 2006.
- 3) 石川亮：「生涯いつでも豊かな読書」の活動へ大学図書館も参加を。大学と学生, 447, pp.52-58, 2002.
- 4) 永田治樹：大学評価と図書館評価。情報の科学と技術, 55 (12), pp.541-545, 2005.
- 5) 日本図書館協会：日本の図書館 統計と名簿2004, 日本図書館協会, 東京, 2004, pp.263-267.
- 6) 伊藤民雄：インターネットと図書館 平成17年度私立短期大学図書館情報担当者研修会資料集, 日本私立短期大学協会, 東京, 2005, pp.11-52.
- 7) 2003年度会員実態調査報告書, 日本看護図書館協会, 2005, pp.2-3.
- 8) 前掲 5).
- 9) 前掲 6).
- 10) 前掲 7).

資料 1

アンケート回答

No.

お名前；

先生

在職年度は○印、また、在職中でも看護学科生の科目を担当しなかった年度は×印、不在期間は空欄にしてください。

1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005

問 1：添付の看護学科生の図書貸出冊数の表をごらんになって、多いと思われましたか？ 少ないと思われましたか？

() 多い () 少ない

コメントがありましたらご記入下さい。

問 2：他学科との比較数値や、学年があがるごとに平均貸出冊数が上昇していること、5 期生以降、3 年次の 0 冊者がいない等の結果について考えられることをご記入下さい。

問 3：講義や実習の中で学生に、テキスト以外の資料を用いた調査を課すことや、図書館の利用を促す内容をとまなう話など行ったことがおありですか？

() ない

() ある

以下「ある」と回答された方に伺います。

① 教科目名は何ですか？

② 毎年していますか？

③ 1～4 期生あたりと 5 期生 (2003 年 3 月卒業生) ～とでは学生の気質に違いがあるように感じますか？ また具体的なエピソードがあれば差し支えない範囲でご記入下さい。

問 4：3 年次の『看護研究』の指導をしていますか？

() 指導をしていない

() 指導をしている

以下、「指導をしている」と回答された方に伺います。

① 図書館の利用を促すような指導がおありですか？

() ない

() ある

以下「ある」と回答された方に伺います。

② 2003 年の前後で、指導方法に違いがありますか？ 違いがある方は具体的にご記入下さい。

③ 研究指導において、本学の図書館サービスへのご意見がありましたらご記入下さい。

問 5：看護学科生は 1 年次の教養講座の中で図書館の利用の方法について学ぶ機会があります。年々内容が変わって参りましたが、教養講座について何かお気付きの点やご意見がありましたらご記入下さい。

ありがとうございました。

なお、このご回答は個人情報として扱い、目的外利用の厳禁、秘密の厳守、半年以内の廃棄を行います。ご了承下さい。

資料 2

平成14年度看護学科教養講座；情報の集め方・検索の仕方 2

表面

学生番号・氏名

本学の図書館にどんな資料がどこにあるかを捜してみましょう。

どんな方法で調べてもよいので、実際に見つけることができたなら○印をします。教えてもらって見つけた場合には△にしておきましょう。裏面のアンケートも記入して提出してください。

例	○	「浄土への誘い」高松信英著（法蔵館）
1		「広辞苑」（岩波書店）
2		「五体不満足」（講談社）
3		「フロレンス・ナイチンゲールの生涯 上巻」セシル／ウーダム／スミス著（現代社）
4		「看護―ベッドサイドの光景（岩波新書）」増田れい子著（岩波書店）
5		「老化研究がわかる」井出利憲編（羊土社）
6		「マジック手遊び」おもちゃ美術館編（婦人生活社）

裏面

アンケート

問1 これまでの自分は、図書館の本を読む習慣があったかなかったか。

・どちらかといえば あった

・どちらかといえば なかった

◎本学の図書館にどんな本をふやしてほしいと思いますか？

◎本を読むことや、本のことについての話に興味がありますか？

・あ る ・な い

→ ◎最近読んだ本、
や友人に勧めたい本を
教えてください。

問2 これまでの自分は、図書館で勉強する習慣があったかなかったか。

・どちらかといえば あった

・どちらかといえば なかった

◎本学の図書館設備や利用の規則について、なにか希望がありますか？

<すぐに実現できるかわかりませんが今後の検討にしていきたいと思います。>

(**あった** の人の記入欄)

(**なかった** の人の記入欄)

問3 入学時のオリエンテーションと今回の教養講座2回について、感想がありましたら記入して下さい。
今後の参考にしたいと思います。

資料 3

表面

本日はお疲れ様でした。ご熱心に受講していただきありがとうございました。

今後よりよい公開講座を開講するための資料として、下記のアンケートにご協力をお願いいたします。

アンケート

質問に当てはまる番号に○を付け、質問事項にお答え下さい。

本日の受講講座を番号に○をつけて下さい。

1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・
13・14・15・16・17・18・19・20・21・22

1. 公開講座を何でお知りになりましたか？

1. 地元新聞の広告（信州日報・南信州・週刊いいだ）
2. 地元新聞の記事 3. タウン情報紙
4. 家 族 5. 知 人 6. 短大からの通知
7. 保育園・幼稚園からの通知 8. 短大関係者
9. ラジオ 10. その他（ ）

2. 開講時期（時間も含めて）

1. よ い 2. わるい

いつ頃がよいでしょうか？ 月、曜日 時間 について
ご記入ください。

3. 年齢

1. 20才未満 2. 20才代 3. 30才代 4. 40才代
5. 50才代 6. 60才代 7. 70才以上

4. 性別 1. 男性 2. 女性

5. 職業（ ）

6. 居住地

1. 飯田市内 2. 下伊那地区 3. 上伊那地区
4. 上下伊那地区以外の県内
5. 長野県外（ 県）

7. 受講料金について

1. 高 い 2. 不 通 3. 安 い

8. 受講講座について感想をお聞かせください。

9. 今後の公開講座への要望（どんな講座を開講してほしいなど）をお聞かせ下さい。

10. 受講希望者が定員を超えた場合今回は先着順といたしました。あなたはどのように思われますか？

裏面

A. あなたはどんなことに興味をお持ちですか？ 興味をお持ちの項目の番号に○印をつけてください。

1. 哲学 2. 心理学 3. 宗教 4. 歴史 5. 地理
6. 政治・経済・法律 7. 生活・消費者 8. 女性 9. 福祉
10. 教育 11. 民俗 12. 物理・化学 13. 生物
14. 医学・看護 15. 食品・栄養 16. 料理
17. 服飾・手芸 18. 育児・保育 19. 産業
20. 芸術 21. スポーツ・諸芸 22. 言語 23. 文学
24. 情報 25. その他（ ）

また、さらに具体的な事柄がありましたら、上記の番号と関連する番号をご記入の上（ ）内にご記入ください。

関連する
番号

No. —（ ）

No. —（ ）

No. —（ ）

No. —（ ）

No. —（ ）

B. 上記A. の、○をした、または、記入をしたジャンルについて、本やインターネットで調べるなど、自分で学習することがありますか？

（ ）あります。 （ ）ありません。

C. あなたは、公共施設・文化施設をご利用になりますか？

- （ ）公民館
良く利用する 時々利用する あまり利用しない
- （ ）図書館
良く利用する 時々利用する あまり利用しない
- （ ）体育館・グラウンドなどのスポーツ施設
良く利用する 時々利用する あまり利用しない
- （ ）その他（ ）

後ろへ —————→

ご協力ありがとうございました。

飯田女子短期大学紀要 第23集 (2006)

資料 4

	年 度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	備 考
	館 長 名	小 西 昭	工藤ハツヨ	工藤ハツヨ	工藤ハツヨ	片 桐 充 昭	
	委員 長 名	小 西 昭	清 水 茂 雄	清 水 茂 雄	清 水 茂 雄	清 水 茂 雄	
資 料	図書購入予算	¥8,500,000	¥8,500,000	¥8,500,000	¥8,500,000	¥8,500,000	
	図書蔵書冊数	52,771冊	54,920冊	56,854冊	59,000冊	60,850冊	蔵書数 (洋書) 60,850 (3,737)
	受入図書冊数 (うち購入冊数)	1,671冊 (1,478)	2,149冊 (1,984)	1,934冊 (1,559)	2,146冊 (1,921)	1,850冊 (1,501)	
	総記	46	65	45	56	39	2,381 (131)
	哲学	77	82	127	78	112	3,804 (284)
	歴史	17	33	14	33	39	2,229 (71)
	社会科学	526	624	525	636	526	17,223 (1,168)
	自然科学	660	796	733	625	592	16,206 (1,189)
	技術	172	239	160	251	149	5,190 (448)
	産業	33	68	29	36	43	1,139 (18)
	芸術	53	128	114	185	147	3,641 (72)
	言語	25	13	9	20	16	1,204 (217)
	文学	57	92	80	101	145	4,730 (134)
	絵本	5	9	98	125	42	3,103 (5)
	視聴覚資料数	696本	733	763	829	904	
	視聴覚資料年間増加数	59本	37	30	66	75	
	購入雑誌数	139種	138	141	142	152	
	雑誌製本数	135冊	137	138	159	109	2,599
	新聞	10種	10	10	11	11	
利 用	開館日数	232日 (~3/15)	240 (~3/31)	226 (~3/15)	242 (~3/31)	235 (~3/31)	
	貸出冊数	8,638冊	10,080	9,804	9,389	9,688	
	学生	6,933人	8,509	8,296	8,254	8,266	
	教職員	1,705人	1,571	1,508	1,135	1,422	
	一日平均貸出冊数	37冊	42	43	38	41	
	視聴覚資料貸出冊数	321本	438	762	558	767	
	視聴覚資料館内閲覧数	66本	52	134	105	128	
	入館者数	44,808人	50,873	46,786	49,409	47,246	
	一日平均入館者数	207人	212	193	204	201	
	学外来館利用数	59人	50	56	90	89	
相 互 協 力	館内コピー人数	1,342人	1,866	1,411	1,524	1,523	
	館内コピー枚数	9,566枚	15,005	10,525	12,306	11,238	
	複写依頼数	147件	245	203	242	672	
	複写受付数	8件	18	44	21	72	